

小松天満宮所蔵『新式今案歌』について

綿 拔 豊 昭

要 旨

連歌の制作に必要な規則や知識を詠み、記憶に役立てようとした和歌を「式目歌」という。その基礎研究は木藤才蔵によって進められたが、その基礎資料が木藤所蔵本であったため、「式目歌」の研究はその後ほとんど進展しなかった。しかし、その木藤が所蔵していた基礎資料が、国文学研究資料館に所蔵されることになり、共同研究もなされた。今後、「式目歌」の研究は進展していくものと考えられる。その一助として、木藤旧蔵本を参照したうえで、一般には公開されていない、小松天満宮所蔵の『新式今案歌』を翻刻・紹介する。

—

連歌の式目を学習する者のために詠まれた和歌がある。辞典類では「式目歌（しきもくうた）」として立項される。

廣木一人氏は『連歌辞典』（二〇一〇年、東京堂）「式目歌」の項で以下のように要点をおさえた説明をなされている。

連歌式目の内容を和歌に詠んだもの。宗砌作と伝えられる十二首の『式目歌』が早い。その後、その増補版が多数作られ、さらに、肖柏の式目改訂に準拠したものとして、三条西公条・周桂著『式目歌』、注釈的要素を加味した紹巴著『歌新式』（一五八九年成）なども作られた。俳諧でも貞徳によるものなどがある。

右のうち紹巴著『歌新式』については、木藤才藏氏が論じられており、次の六つの諸本を調査されている。⁽¹⁾

- ① 京都大学付属図書館平松本
- ② 京都大学付属図書館本
- ③ 太田武夫蔵本 その一
- ④ 同 その二
- ⑤ 大阪天満宮文庫本
- ⑥ 木藤才藏蔵本

そして木藤氏蔵本を基準に、諸本の和歌の出入りなどを明らかにされている。

右の六本のうち、三分の三本が個人蔵であり、しかも基準とされたのが木藤氏蔵本であったため、紹巴作の『歌新式』については、木藤氏が述べられて以後、研究が進展しなかったように思われる。

しかし、その後、木藤氏の蔵書が国文学研究資料館の所蔵となり、二〇二一年度の国文学研究資料館の共同研究として「国文学研究資料館木藤才藏コレクションの基礎的研究」が行われることになった。その共同研究の一員として、木藤氏旧蔵『歌新式』を調査する機会を得た。太田氏の所蔵本は、太田氏が亡くなられたのち古書市場で扱われ、現在の所蔵者については不明だが、木藤氏旧蔵本が公的機関の所蔵となり、研究者の閲覧・調査が可能になったため、『歌新式』の翻刻や注釈がなされ、『歌新式』の研究が進むことが期待される。そうした研究の進展の一助として、現在、一般に公開されていない小松天満宮所蔵『新式今案歌』を紹介したい。

二

小松天満宮（石川県小松市天神町1）は、前田利常（一五九四―一六五八）が現在の石川県小松市にあった小松城の鬼門に建立した神社で、初代別当として北野天満宮から能順（一六二八―一七〇七）を迎えた。そのおりに持ち込まれたものか否かは、能順の蔵書目録がないため不明であるが、現在、小松天満宮には少なからずの連歌書が所蔵されている。その中の一点に『新式今案歌』がある。小本、袋綴、一冊の写本で、多少の虫損がある。表紙左肩に題簽が貼られ、「新式今案哥 全」とある。題簽は後補のものと思われるが、巻首題も「新式今案哥」であり、本文と同筆であるため、書名を「新式今案哥」として問題はない。通用の文字を用いて、本稿では書名を『新式今案歌』とする。

『新式今案歌』は、書写年代、書写者については不明である。稿者の印象としては、近世前期の書写と思われる。一面七行で記され、原則一首を二行で記しているが、和歌によっては上句（五・七・五）と下句（七・七）が、数首を

はさんで記されることがある。小松天満宮本の書写者がそのように改変するとは考え難いので、すでに底本がそのようであったと考えるべきであろう。何故にこのようなことになったかは不明だが、もともとあつた式目歌の写本に、後で知りえた式目歌を余白等に書入れをした本があり、それを写すにあたって、もともとの本文と書入れを区別せずに写したからと憶測をしている。

本文には欠落したものもあり、善本とはいいがたいが、木藤氏旧蔵『歌新式』には見られぬものもあり、異同のあるものもある。今後、『歌新式』の研究の一資料として、以下に翻刻をあげる。又、便宜上、通し番号を付した。もともと一首であつたと考えられるものが、上句と下句で行を飛ばして記されている場合は、共通の番号を用い、番号の下に「a」「b」を付した。虫損など難読な箇所は□で示した。また『歌新式』と意味が異なる異同などは『歌新式』の本文を（ ）を付したルビで示し、また大きく異なる点などは「＊」を付して注記した。

【翻刻】

新式今案哥

- 001 韻の字の朝夕にまたしらゆふの詞を今は嫌わすとしれ
 002 韻の字にむかしは人や嫌けんにたる詞の時雨夕暮
 003 置所替らは二句を嫌ふへきつゝけりの文字さてはひんして⁽⁵⁾
 004 上の句はつゝと留らす下の句に二つ付と心得てせよ
 005 けやけきとあまとまらす句のすへのけりとしてとはにつ有へし

*『歌新式』「ならんとはあまとまらす句の末のけりとしてとは四そ有へき」

006 こかるゝに紅葉を付よ紅葉はにこかるゝ詞付てよしなし

007 ひむろには雪を面嫌ふなり氷にひむろ折をかゑへし

008 花にたゝ風や霞を付るへし耳に立句は遠輪廻なり

009 竹によを付る言葉のよわけれは糸にふしともいかゝ有へき

010 近歌^⑤は明石か浦の朝霧のうたより外に舟をもとめよ

011 生駒山いさむる嶺の詞をはこゝろゑ分て證歌とはしれ

012 まきく^⑥の心は別に替とも源氏の句をは三句つゝけし

013 本末に弓をは付よ弓にまた引^{を引}もかゑるも用付そかし

014 牡丹をは夏に用てふかみ草はつくくとも名をやかゑまし

015 山の葉^をにあらぬ嵐も折をかゑ一座のうちに一つとそしれ^⑦

016 松虫やすゝむしあらはきりく^⑧すおもてを替よさてははたおり

017 あめ二つさめとあまとは一つ宛雨に面を替て有へし

018 雨二つ過ての後は夕立や時雨の雨にま□一つせよ

019 馬の外懷帑を替て駒あらはひま行駒はまたも有へし

020 春寒き秋の寒きも一つつゝ冬はさむきとさゆる有へし

021 砌をは居所に打越嫌ふなり鳥の臥床居所ならぬこそ

022 春風や松風もまた秋風も懷帑を替て二つゝつせよ

- 023 の文字入て松の風とはたゝ一つ一つの句をは松風とせよ
 024 あかつきとその暁と扱はまた神代君か代二つ有へし
 025 夕部またけふの詞は二つつゝ昨日や明日は一つとそ聞
 026 今日（かはり）の文字くわはるからにさま／＼の夜分の心のかれそ行
 027 古里の二つは一つ旅なれや名所なりとも其内そかし
 028 二句あらは岡やみなどや池堤一つは名所磯も渚も
 029 宿過てまた旅の宿其外にやとり有へし露のやとりも
 * 「夜」を見せ消しして「宿」とある。
 030 庭一つ庭のをしへにまた一つ寺やかう居は其外そかし
 031 春秋に鴈そ啼なり猿の句の過ての後はましらとやせん
 032 旅の字に云かゑすとも二つ有老の句過て老木なるへし
 033 男又かつら男と替てせよ命過てはむしに有へし
 034 なりにけり思ひしに共思ふとも所を替て二つつゝせよ
 035 恋しくと恋しきと又詞にはかわらてもよし恨うらむる
 036 秋冬の時雨過てもなくせみのこゑのたとへは又も有へし
 037 あした一つ今朝（かはり）と計てまた一つ夕部の文字は二句するそよき
 038 鶴田鶴と云替（文化）て有をもかけ名残（ねざ）も二つ恋と月花
 039 こすへ過松の類に有てのちこすゑの秋はまたも有へし

御法過懷昏を替てまたあれはのりをこゆると外にもとめよ
 二つ在物はのきかき野辺と峯過（小野は一は名所にそする）ての後はをしね有へし
 恋の句は待も分れも逢事も忍ふ詞も二つもとめよ
 遠近はをちと計に又もありもなしはなしは上下にせよ
 涼しさを夏秋にせよ言の葉の過ての後は言の葉の道
 苔筵法のむしろに引合せ筵の外に思ひあわせよ
 季を替て有明二つ三ヶ月は一座の内に一つとそ聞
 三つ有神と神代と名神と天照神の類とそしれ
 藤の字の過ての後は藤原の詞の類もとむるそよき
 青柳も楊も春に有て又一つは季をはかうるとそ聞
 春に有桜二木の外にまた心を付よ秋の紅葉は
 紅葉過梅や桜や草ならば紅葉のはしは又 （出づれば）むへし
 浜萩萩や萩の焼原引合せ秋より外に一つ有へし
 三つ有薄の外にをはなまたすくろもほやも引合すへし
 都過名所に一つあらはまた旅の心を尋てやみん
 塩有て塩焼詞過たらはうしをとや又おもひよらまし
 瀧一名所に一瀧つせの外はなみたの花にこそあれ
 ひかん（坂岸）とするはしやつきやう岸は只名所只の句三と知へし

- 058 ふみ過て季文にせよ旅にせよ玉札は其内と知へし
 059 かり過て云替て又小鷹狩 ■ かりは其外にせよ
 * ■は漢字一字（「獺」か）を消して、右横に「ケタモノ」とある。『歌新式』では「猯」。
- 060 庭鳥と外に異名は只一つ鹿や猯も心得てせよ
 061 小車や法の車や水車品をは替て句作をせよ
 062 草の花過ての後は云かへて花咲草の庵ともせよ
 063 灯や法の灯過ぬれははつにもとむる灯のかけ
 064 三有は独の後に恋をせよ月の類は其外そかし
 065 雪の句は四つに定まる似物のをもかけならは面かゑへし
 066 富士の雪昔に替心哉きゆるも今の世や春そかし
 067 開一つ名所に一春秋を留るは恋に引そあわする
 068 氷過汀の外は霜雪や泪に氷むすふとそ聞
 069 入相の過ての後は夜の鐘かものかねとは尺教にせよ
 070 雲云文字は懷昏を替て四つ雲井半天其外にせよ
 071 宮井たゝ神祇皇居に四有は二つはいつも名所をはせよ
 072 朝風や朝霞などの朝の字は折を替つゝ四つとこそ聞
 073 夕風や夕霜などの夕の字は折を替つゝ四つ有としれ
 074 鳥の外禽獸に春の鳥過ての後は小鳥ともせよ

075 火は四の物に定る其外のほたるの火をは面にはせず
 076 玉の字は四に定る其外は魂の玉面きらわす
 077 葉の四は木の類にて折を替草の類は五句去としれ
 078 ねぬる過ぬるの詞はうちにせよねやも眠も面替へし
 079 独ねの類のね字四あらは国も眠も面かゑへし
 080 真木の戸や扱は関の戸谷の戸は扉も面替て四せよ
 081 平世過述懷二後前に仏の世をは引そ合する
 082 恋の世は述懷仏の世面はかりを嫌ふとそきく
 083 梅の外紅過て其外に冬木なとゝや思ひよらまし
 084 橋一御階^{はしかけはし}梯 又名所過ての後は夢のうきはし
 085 関の戸や岩や隠家村栖居所に打越嫌としれ
 086 居所にたゝ折をは嫌へ草ふきや田つらの庵やとり栖も
 087 端ぬ又霧の籬や蓬生やいつれも居所に二句嫌也
 088 ふる物に霰^{あられ}はしりや暁や朝夕部二句嫌へし
 089 月共に日次月次何れをも打越嫌ふ物とこそ聞
 090 植物に菌^{その}や心の松杉に枯野^{かれ}埋木^{うもれ}二句嫌へし
 091 田はかりは植物ならす鹿を追守共あらは二句嫌へし
 092 生類や又は植物草の字に二句隔るは秣^{まぐさ}なりけり

- 093 植物に二句嫌へしなわ代や野辺の下萌藪と草むら
- 094 植物に打越嫌へ木にあらず草にもあらぬ竹とこそ聞
- *『歌新式』に 093・094 なし。それにかわつてこの位置に「植物と水辺に二句嫌へし茂る芦の屋陰の蘆火を」がある。
- 095 人と身と砧きぬたにいしやう打越を嫌ともしれ類に贅
- 096 打越に生類も又水辺共嫌へ生をはなつ言葉
- *『歌新式』に 096 なし。
- 097 駄路むまやや馬の餞馬駒に面を替て句作をせよ
- 098 寒きには長閑成をは付したゝ雲曇も二句嫌へし
- 099 あつきには寒きを付す冷しき身入もたゝ二句嫌へし
- 100 鳥の啼鐘のなるには二句嫌ゑひゝきに声は句にそよるへし
- 101 末こすへに梢木樵こりに木の字音に声見るにかくるゝ二句嫌へし
- 102 春秋の暮に夕の字影に陰形見に見るを二句嫌へし
- 103 遠にはをちの詞と遥なり文字を打越嫌なりけり
- 104 a 打越を嫌ゑ涙に袖の露
- 105 思ひにはもゆる心の有ならは火の字の詞嫌なるへし
- 104 b 又は涕になくといふ字を
- 106 をわんと（ぬ脱か）をわんぬは二句嫌へしふのぬにふのぬ付句計そ
- 107 a ねさめにゆめを付す（暗）暁

- 108 昨日には今日と明日をは付されは夢に現も二句嫌へし
- 107 **b** あくる詞も二句嫌へし
- 109 弓に箭は懷昏を替よ九重に都も同じ嫌ひやうなり
- 110 蓑に笠夕立に暮明暮に夕と朝と二句嫌へし
- 111 **a** 東雲に夕の文字を嫌ねは
- 112 窓門に戸の字は二句を隔つれば面を替て然るへきなり
- 111 **b** たそかれに朝くるしかるまし(あした)
- 113 くらきには暮を打越嫌へし扱は光の陰によるひる
- 114 **a** 野分をは暴風(はげ)とそ書扱は夕(ゆふ)へ
- 115 天に空打越嫌へさてはまた青きに緑(なご)り有明(ひある)の月
- 114 **b** 分と野とを二句嫌へし
- 116 入相(いしやう)に相とを二句去て湊路に道の類とそ知れ
- 117 **a** 荻の声風に打越嫌へし
- 118 木の字は歎ゆるをは二句嫌へし魂に玉たくひ成へし
- 117 **b** 嵐に家風もひとつり
- 119 物思ひ扱は物うき思ひける何れの文字も二句嫌へし
- 120 名残には名の字残の文字や又浮につらきも二句嫌へし

* 『歌新式』に120なし。

- 121 すくなきはかなきと又なきの文字付る計を嫌なりけり
(二) 脱心
- 122 知と云文字に打越嫌へたゝしるしるへき替る詞を
- 123 二句嫌多何所にいつと何になそいかに何れの文字の類そ
- 124 なるとなりなれ／＼成になるの文字只打越を嫌なりけり
- 125 てにをわをなりなれなりを云替て付る計を嫌なりけり
- 126 たつぬるにたとる心のひとしくはそのなによりて二句嫌へし
(句)
- 127 a 冬ならすうへ物ならすまゆの霜
- 128 生死や命に付すうそことにまことも同じ嫌へうなり
(二) 句去
- 127 b かしらの雪は似せ物そかし
- 129 ひくらしにせみやむかしにいにしへも楓に紅葉折を替へし
- 130 一文字は面を嫌へ其外の数の字はたゝ折を替へし
- 131 a 嫌ぬはいさり釣に舟の文字
- 132 三かな面を替よ扱は又御階御ましは事によるへし
(三)
- 131 b 御扱にはしへ難面になを
- 133 比の字は韻に四也其外の中に有てはいくつなりとも
(字さりなるへし)
- 134 a 間の字には夕間暮共付てせよ
- 135 岩に石筆の詞に鳥の跡懐昏付て有へきとしの
(ママれしか)
- 136 岩二住所や岩尾の外に又真砂は面嫌ふとそ聞

- 134 **b** 蛙に川の文字も嫌わす
- 137 さゝとしの面を替よ神に又神樂の文字は同かるへし
- 138 **a** 付るには老に昔を嫌ねは
- 139 竹とすゝ三句隔よ竹にまたさゝといふ字は五句嫌なり
- 140 月日星三句隔よ七夕の天の河原も嫌はさらめや
- 138 **b** 老に若もくるしからしな
- 141 ふり物の数は雨露雪霰この類ひをは三句隔よ
- 142 **a** 何の字に□といふ文字替れ共
- 143 霞霧雲や煙のそひき物之は三句嫌なるへし
- 142 **b** 付るは三句嫌ふへきなり
- 144 三嫌ふ物は木に草鳥に虫鳥獸に魚のたくひそ
- 145 名所には越路の類二句嫌名所に名所三句去へし
- 146 **a** さひしさにさほの詞に小の字をは
- 147 風や雲野山海川夜るや日や草木の文字は五句去としれ
- 148 述懷や神祇尺教旅に恋何れの句をも五句去と知れ
- 146 **b** 付計を嫌とそきく
- 149 苔衣墨の衣や身を捨る老の古へ述懷としの^(五)
- 150 隠家や浮身の命世の昔生死ゆかり述懷としれ

- 151 a 獣を狩はもあらはかりに鷹
- 152 朝附日朝日計の事ながら双ひの岡は月日にそなる
- 153 夢枕衣の泪月にふねいつれも七句隔てそよき
- 151 b 付るの心思ひ定めよ
- 154 松や季や竹田の煙何れをも七句隔て思ひよるへし
- 155 a 山かつに山の字計五句嫌へ
- 156 水辺に天川舟ならね共舟の文字には七句去へし
- 155 b 山類ならす横川（マ）小鳥
- 157 舟岡や竹田松嶋衣川同じ文字をは五句嫌へし
- 158 a 獣に定めかたきは龍なれや
- 159 衣類には嫌（ならぬ物から）わされ共七夕や霞の衣七句去へし
- 160 似物の花の瀧波花（雲の水）の波水辺ならぬ（ぬ物の「物」脱か）こそ聞
- 158 b 賢人の言の葉を見よ
- 161 波の雪木葉衣は季を持て植物になる降物になる
- 162 a 水辺にならさる物は早苗菅
- 163 松垣と言こそ替れ桜戸は花のあたりの住居とそ知
- 164 袖の露降物になり（そかし扱はる）句作の心によりて恋としりなん
- 162 b 鳴と鷺との類ひなりけり

165 水辺をのかるゝと知れ須磨明石

* 下句欠。『歌新式』には「上野や岡の詞有ては」とあり。

166 a 鞠の庭秋の詞のなくは只

167 浦なみの詞そわすは水辺に難波も志賀もならさると知れ

166 b 里の庭と一つなりけり

168 かきつはたせうふや蓬まこも草ひむろたらひの水も水辺

169 水辺をのかるゝ物はなみた川硯の水に軒の玉水

170 a 国の名に国の海にまた

171 たるひ又月の氷に苗代や霞の網も水辺の外

172 相坂は山類そかし扱は又清見か関は水辺としれ

170 b 名所の句をは三句隔よ

173 山類に嫌ぬ物は川嶋や田蓑の嶋に浮嶋か原

174 a もろこしの後に唐国又そ有

175 岩橋や薪瀧つ瀬猿句は山類ならぬ物とこそ聞

176 清見寺只水辺に成なれば泊瀬の寺は山類そかし

174 b あつまに越路二句隔へし

177 小野の奥吉野の奥も山類にならすとそしれきそち鈴か路

178 a 春秋と恋の句は五句夏と冬

- 179 驚^{みね}の嶺^{みね}鶴の林は山類や植物ならは理をしれ
- 180 杣人や室の八嶋や雪山を山類ならぬ物とこそ聞
- 178 b 旅の類は三句つゝけよ
- 181 恋の山句にそ寄へき三嶋江や淡路の嶋は山類の外
- 182 a 岡や峯ほらや尾上の麓坂
- 183 鳥^{（鳥）}の巢や鶴の古巢^{（巣）}を雑^{（雑）}にして只鳥の巢を春と知へし
- 184 あさ鷹や聞すへ鳥の詞にて狩場は春になるとこそきけ
- 182 b そわ谷嶋は山の躰なり
- 185 年越て氷なかるゝ雪のひま霰はしりを春としらなん
- 186 a 村や瀧や杣や炭かまの
- 187 あかためし須磨の御祓も遅桜白尾継尾の鷹も春なり
- 188 ふかみ草又牡丹神祭り柳をとるも夏になるなり
- 186 b 類は山の用と知へし
- 189 毛をかふる鷹やとや鷹清水汲ひらのまつりも夏になるなり
- 190 a 海川や嶋や泉や江の淀
- 191 うきくさ浮も花を結びそへ鮎をは夏の物と知へし
- 192 散といふ詞の有も秋なれやつたの葉^{（葉）}かつらもみち桐のは
- 190 b みきはも沖^{（沖）}も水辺の躰

193 はや造るうつらに忍ふ草芭蕉はせうに鷹たかは秋とこそなれ
194 草枯くさこに花をむすひてはつ嵐

* 下句欠。『歌新式』には「野への裏枯秋にこそなれ」とあり。

195 a 水辺の用は浪水塩米

196 七夕の詞や相まふつかさめし鴟とすや鳴なをは秋と知なん

195 b ひむろ清水かもとゝ知なん

197 ひやゝかに夜寒身に入冷氣扇を置も秋に成なり

198 a かけひ又塩や塩焼あか結ふ

199 北祭神楽の詞年の内春の来ぬるも冬そ成けり

198 b たらいの水は躰用の外

200 梢せうには花をくわへて若みとり緑り立をや春の松かゑ

201 a 軒や床里窓門にかわらかへ

202 里神楽塩屋宮井や古寺や家を出るも居所の外なり

203 百敷の事にしあれはなへて皆居所の詞も居所に嫌わす

201 b となりや垣も居所の躰也

204 松の門妻木柴人杉の窓草の枕は植物の外

205 花の木の衣の色も季を持は植物に二句嫌ふ物なり

206 木をきるやしほり芦田鶴竹の宮うへ物ならず浮木流木

- 207 a 庭屋また外面の詞其外に
- 208 篠樹えんたのきのあやめに草むしろ草をかるをも植物としれ
- 207 b 簾も居所の用とこそ聞
- 209 蕙床かいす水鶏や蛍夕やみやいさりや又ね蚊も夜分なり
- 210 a 父母や独ひとり中立我と人
- 211 夢の世や常の灯かねかすむ鳥のぬるをも夜分にはせず
- 212 夜分にもあらぬ詞は明はなれ明はてゝとも明過てとも
- 210 b 友関守を人倫と知れ
- 213 三日月の出る詞も有明の入も夜分にあらずとそしれ
- 214 a 飛（花をふる）かわし使やふたり日（月）を友
- 215 夕には蛸付よさてはまた春日にはるひ橘に花
- 214 b 僧津大君人倫の外
- 216 なる神にかみの文字を付されはあしたに嫌へあさかをの花
- 217 稻妻に月日嫌ぬ物なれは日にひるも又同じ事也
- 218 a 雉は只かりに結へは冬そかし
- 219 下紐の言の葉あらは衣類にも夜分にもたゝ五句嫌へし
- 218 b なく声あらは春と知なん
- 220 衣／＼は夜分也けり衣裳には二句隔てや句をは付へき

221 平秋に恋の秋の句有ならは恋の秋にてはたすへきなり

222 朽木には杣をは付よ三句目はにしきの詞あしかりぬへし

223 鏡には山は付よ□得に名所の田あしかりぬへし

* 『歌新式』に223欠。

224 真木の戸に木の字を嫌木の字槇立山は付るなるへし

225 柳の花「欠」散やまふきは草としらなん

* 「欠」は『歌新式』には「桐もさては木のたくひ」とあり。

226 さほ姫は春にて秋の龍田姫たゝ山姫はさうとこそ聞

227 述懷や「欠」引合宛嫌へきなり

* 「欠」は『歌新式』には「無常懷旧是はたゝ」とあり。

228 述懷ののこる詞の尺教は尺教の句と思定めよ

229 上の句の韻字に又下の句の同じ折合嫌ふへきなり

230 求子や星や榊葉蛸うたふ類は神祇冬なり

231 桜貝なつむ詞に水ぬるむうゑゆかた二句嫌ふへきなり

232 桜人青柳うたふ春なれやうへものに二句きらふへき也

* 『歌新式』に226欠。

233 古畑を焼とうつとは春そかし山類に又嫌ふへきなり

234 若葉には花の文字をは加ても夏の一句になると知るらん

235 うゑ物に紅葉のはしはならね共ちるともあらは二句嫌ふへし

三

文学・文芸からの視点で、五・七・五・七・七という形式を用いた表現であらわされる歌をみた場合、それは「自己」と深くかわることが多く、自己の心情や自己の視点でみた自然が述べられるといつてよからう。こうした自己表現は、平安貴族らにとつては身につけるべき能力として優先度の高いものであったと考えられる。しかし、勅撰和歌集の撰集にあたつて將軍家がかかわる以前の武士にとつてはそうではなく、橘成季『古今著聞集』（巻九）に載る義家と貞任の短連歌（衣川連歌）の話や『平家物語』（巻十一）に載る京都の公家に「わが国の梅の花…」の和歌で応じた宗任の話が成される背景には、都から遠距離の陸奥に住む武士には和歌的な教養はないという認識があつたと考えられる。⁽²⁾

一方、「自己」の表現とは直接関係がない歌も存在する。学習・記憶等を目的とするものである。「実学的歌」といってよいであろう。

先に廣木氏が執筆された『連歌辞典』の項目を引用したが、その引用部分に続き

いづれにせよ、歌だけで式目を理解することは困難で、一応の知識のある者が記憶を呼び起こすために用いたと考えられる。

と述べられている。むろん式目歌が「記憶を呼び起こすために」用いられたことはあつたと考えられる。だが、かつて山田孝雄・星加宗一編『連歌法式綱要』（昭和十一年、岩波書店）に翻刻紹介された「連歌秘鈔」に「連歌去嫌の哥」

が五十二首が載り

右ハ宗硯が宗祇に差合のことなどを問ハれしとき答られたる歌也ト云

とある。このことが事実か否かはともかく、「差合のこと」を問われたときに、答えた「歌」は、学習するためのものである。このような用いられ方もあったと考えられる。記憶を呼び起こすためのものか、記憶するためのものかはともかく、木藤才蔵氏が『連歌新式の研究』（一七三頁）で述べられたように

連歌の制作に必要な規則や知識を歌によみこんで記憶に役立てようとしたものが「式目歌」ということになる。

馬術、剣術、礼法等といった「習い事」には、いわば「学習補助教材」として、学習すべき内容が詠みこまれた歌が作られることは少なくなかった。文学研究の立場からすれば、「自己表現」と深くかかわらない、すなわち文芸的に評価対象になりがたい作品のためか、まったく無視される存在ではないが、特に注目されるものとはいえない。

しかし、「学習」という目的のために、単純に箇条書にするといった方法をとらず、いわば「知識情報を媒介するメディア」として「歌」の形式を用いたという事実は、「和歌文化」「文化装置」の観点から多少なりとも注目しておく必要があると思われる。

また「式目と歌」は、諸本において、歌そのものの内容は変わらないが、文末表現などに異同があることが多い。こうした異同が生じる理由は、文字資料が書写されて伝わっただけではなく、和歌形式で記された文字資料を記憶し、記憶をたよりとして文字化するといった伝わり方があったからと考えられる。歌を暗誦することは、リズム感があるゆえに容易と考えられるが、暗誦する歌数が大量で、短期になされるとなれば、一字一句異なることなく暗誦することとは必ずしも容易ではあるまい。その場合、文字を転写する場合より異同が生じやすく、「式目と歌」もそうした伝

わり方をしたものがあつたから細かな異同が多いと考えられる。「伝授」に用いられる歌は、師から弟子に何が伝えられたかだけではなく、どのように伝えられたかについても多少なりとも注目しておく必要があると思われる。今後の課題としては、文化的にみた「式目歌」の評価があげられる。

〔注〕

（1）『連歌新式の研究』（平成十四年、三弥井書店）。

（2）貞任・宗任の伝承については、星野岳義「安倍貞任または安倍宗任に関する伝承―語りからアプローチする日本列島―」（『社会学論集（19）』二〇一二年）を参照した。

〔附記〕 本稿をなすにあたり、貴重な資料を調査させていただきました小松天満宮・北畠能房先生に厚く御礼申し上げます。また本稿は、国文学研究資料館共同研究「国文学研究資料館木藤才藏コレクションの基礎的研究」（二〇二一年度）によるものです。

